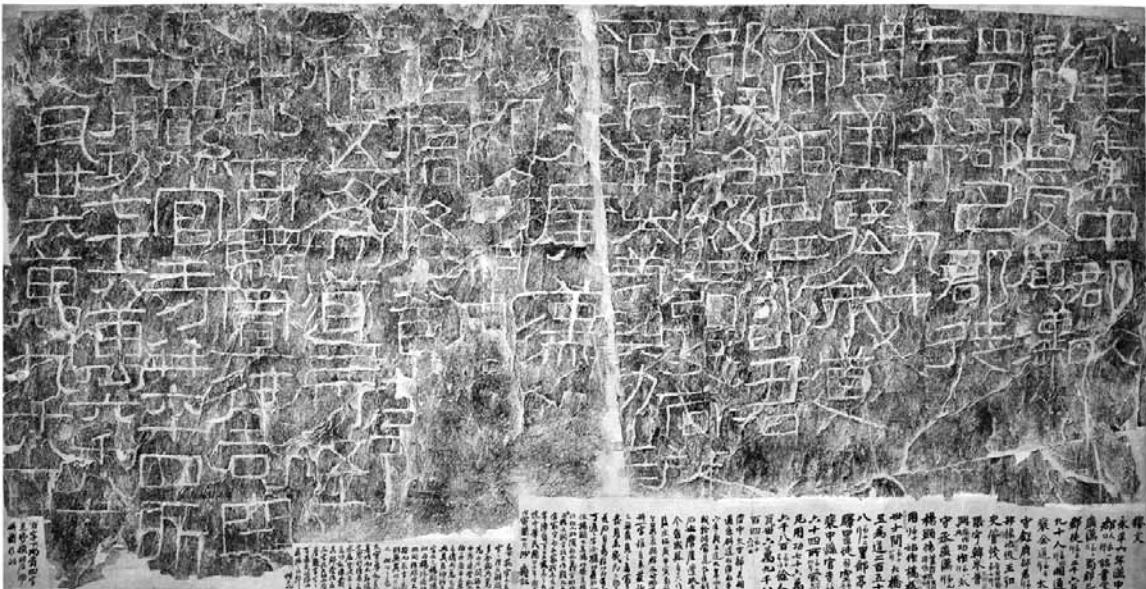


図版①



図版②

書博本



家藏本

図版③



室金石選集の第一「開通褒斜道刻石」(日本習字普及協会刊)として刊行した(図版③)。巻末には、整拓本の全体を縮小印カラー版で付した(図版①)。本号表紙には清朝後期に制作された「百漢碑硯齋縮摹拓本集」の「開通褒斜道刻石」の拓を示した。

伊藤滋(書齋名・木鶲室)

「落ち穂拾い記」下

(47)

50代の始め頃に、北京の大学で日本語を教える仕事に就いた。その余暇に中国各地を巡り、古書店等の金石拓本資料などを探し求めた。この時期によく出入りしていた上海の古玩店で、「開通褒斜道刻石」の淡い拓調の旧拓本の横披を示された(図版①)。補刻される前の旧拓であり、整拓本であるのが嬉しくて購入を決めた。しかし店側は、値段が未定なのでその場で購入することは出来なかった。そこでメモ代わりに写真を数枚写した。帰国してからその写真と開通褒斜道刻石の影印資料と比較して驚いた。書博本に匹敵する拓であった。後日、価格も知られたので、中国の友人に依頼して、届けていただいた。これを機に、開通褒斜道刻石を丁寧に比較検討した。当时、前号で紹介した書道博物館所蔵の吳昌碩題跋本が、最旧拓本とされていた。「增補校碑隨筆」にも書博本を「清初拓本」と評していた。両者を比較すると字画の状況は、ほぼ同じであるが、5行目の「褒」字や末行の「瓦」字などの点画には、明確な相違がみられ、家藏本のほうが、より旧い拓であることを示していた(図版②)。更に書博本は剪装本であり、家藏本は整体であるので摩崖の全体旧拓状況を窺うことが出来る。僅かな拓紙の破損があるが、「開通褒斜道刻石」の日本にある最高拓本であるとの認識を得た。2003年にこの整拓本を写真にて剪装にし、木鶲

書道芸術院 令和の群像 (2023)



川村美泉

再出發

昨年秋、突然の病氣に襲われました。日々の生活中に注意を払い、周囲の協力を得ながら、今日の私がいます。仕事をセーブし、しばらく作品に関わっていない焦りもあり、さあ作品制作を！と意気込む気持ちの一方で、とても臆病になっている自分がいます。そこで、心の中に湧いてきたのが、「私にとって書とは？」という問いかけでした。確固たる理論も持たず、覚悟もない。

した。あそこがダメ、ここもダメ、と考えるうちに、余分な力が入り呼吸ができず、無理だ／書けない／と何度も思ったことでしょう。

しかし、今、墨の香りが心地よく、筆を持つと安らぐ自分がいます。先人の書を倣い、生き方に触れたいと努める中で勇気をもらい、また意氣消沈する時も。この繰り返しではありますが、もがき苦しんでいた

た。「下手は下手なり。書き続けていなければ何かが見えてくるんじゃない? 謄めず書き続けること。きっと何かを掘ることができると思うから。」長い年月を経て、今、私が辿り着いているのはここなのかとあらためて勇気をもらいます。

ただ締めくくりに追われて作品を書くだけの日々を送ってきたからでしょう。展覧会での入賞を目指していた若い頃。少しでも自分らしい作品をと七転八倒していた時期もあります。

頃より爽やかな気分で書と向き合うことができています。全身全霊で書に携わっていますから、先生方のことを思う時、自分自身をぶがいないと感じるばかりですが、行く道のはるか彼方、見え隠れする一灯の左が私にとっての書だと気づきました。



令和4年度書道芸術院秋季展併催推薦作家展「天遊」

川村美泉書

書を習いたい！」と近所の書道教室に通い始めた小学5年の自分や、応援してくれた、今は老いた両親に恥じぬよう感謝の心を胸に、仲間とともに書を全うします。

書のひろば

理事長 下谷洋子

書道芸術院秋季展 併催推薦作家展開催

殊の外暑い夏が過ぎ去り、秋が駆けあしで深まる中、本院主催の企画展「書道芸術院秋季展」並びに併催の「書道芸術院推薦作家展」が、10月3日から8日まで、セントラルミュージアム銀座とアートサロン毎日の2会場で開催されました。

第一会場のセントラルミュージアム銀座には、本院財団役員(顧問)・理事・監事・評議員・参事)、2月の第77回書道芸術院展特別賞選考に合わせて選抜された作家(春華賞候補)・新審査会員・審査会員候補公募(305点181名)より選考された秋季菊花賞10名・秋季俊英賞41名の合わせて177名の作品が展示されました。

パーティションの立て方を前回と変え、役員の展示場所も少々見直したため、明るくスッキリした印象になつたかと思います。これは事務局のアイデアでした。

アートサロン毎日の「推薦作家展」は3年目となり、今回14名でした。各々7月の下見会を経ての出品となつたため、皆さん工夫して力のこもった作品を披露できたようです。今回の推

薦作家の14人の中から今年の第74回毎日書道展のグランプリがおふたり出たことも嬉しい出来事でした。
7日には秋季展公募の表彰式及び研究会を行いました。財団の役員他多数の会員が出席され、終了後には4年ぶりに2階にて祝賀懇親会も行われたため、久しぶりに和やかな楽しいひと時になりました。ご来賓には毎日書道会の堀内様、毎日新聞社の桐山様がお見えになりました。

アートサロン毎日の企画展は、3年でひと区切りとしているため、来年は新たな企画展になる予定です。



秋季展表彰式での受賞者たち



秋季展懇親会で乾杯の挨拶をする辻元大雲顧問

企画委員会開催

10月6日秋季展開催中、今年度2回目の企画委員会が開かれました。まず、自己紹介をかねての総支局や社中の問題点などの近況報告をしていただきましたが、総局、支局によって活動の幅にかなり違いがあるようです。次に学生展ワークショップへの協力、本院への提案などでしたが、活発でユニークな発言がたくさんあり、今後の本院の活動に参考にさせていただきます。

- 2024 新会員作家展
- 2024 毎日チャリティ募金
- 2024 現代の書新春展
- 2023 ☆恒例の事業
- その他

高野山書道協会常務理事会

10月17日TKPガーデンシティPR E M I U M品川高輪口『カンファレンスルーム3E』にて

第57回高野山競書大会の経過報告と、第58回(令和6年度)の競書大会開催について協議しました。

58回展の出品日程・規定などは、57回展を踏襲しますが、2次審査・最終審査はコロナ禍以降東京別院でコンパクトに行って来たため来年も引き続き東京別院での審査となります。

(詳細は後日掲載)
出品のご協力をお願いします。

10月17日如水会館にて
☆第74回毎日書道展の件
・入場者、各展の実行状況について
山形・九州展を残すだけになりました

たが、74回展の入場者は、どの会場とも盛況で、特に地方展の中国・四国・仙台などは昨年を大幅に上回りました。
☆第75回展記念展に向けて

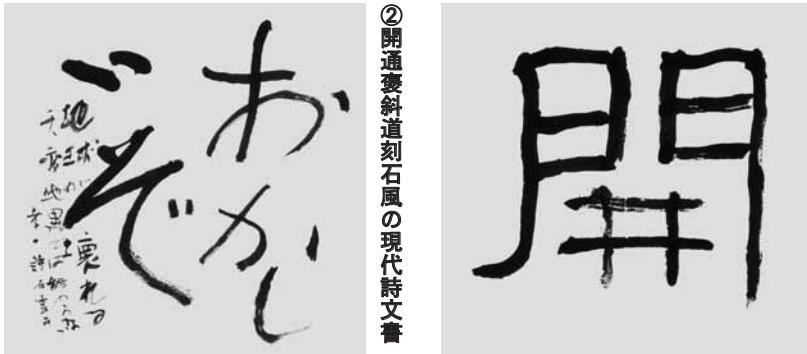
- 日程、役員について
- 特別展、記念巡回展について

第75回書道芸術院展は記念展となります。また、記念展のため、東京展では特別展示があり、地方の5会場では記念の毎日現代書巡回展も開催される予定です。日程及び詳細は、後日、本院の年間予定表やこの“ひろば”にて発表いたします。

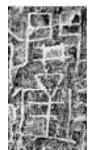
現代詩文書基礎基本講座(42) 小竹石雲

◆開通褒斜道刻石

①写実的臨書



原帖



【開通褒斜道刻石】（後漢・66）

漢字からの造形だけではなく、かなの造形からでも変体がなを使えば自由に変化させることができる。例として“ばら”で構成してみる。

①者羅

②盤等

③半良

【開通褒斜道刻石】（後漢・66）

- 漢中太守の鄧君が勅命を受けて褒斜道改修の難工事を完成させた功績を記したもの。
- この碑の他13種の刻石は、褒河ダム建設で底に沈む寸前に岸壁から切り取られ、現在は漢中博物館に移設されている。

特徴

- 風化により文字と石紋が一体となり、素朴で独特的風格を醸し出した古隸の名品である。
- 直線を基調としながらも岩肌の状態で曲線化された妙味に心ひかれる。
- 字間と行間が詰まり、大らかな雰囲気がだが、横画が水平に揃っているのが特徴である。

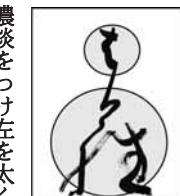
▽臨書に当たって

- 絶壁にへばりつゝ体勢で書かれ刻されたのだろう。鑿の音のみが宿する神秘の光景を思い描き心落ち着かせ内への闘志を秘めて一心に書いた。
- 文字の内外に生まれる空間の把握充実こそがこの刻石の生命と思い、自然と一体になりたい気持ちで伸びやかに羊毛長鋒で書いた。
- ▽開通褒斜道刻石の現代詩文書
- 巨大きなキャンバスに描かれたこの石の風趣は我々凡人には捉えがたいスケールだが、極力一点一画、一字一文字に精魂込めて書いた。
- 現在の世界情勢を反映した詩とはマッチした思いでいる。
- 神への畏敬の念を忘れることなく書きたいという思いを一層深くした。

「おかしいぞ地球が壊れる天変地異では終わらない」 前田孝一詩

基礎基本講座

前衛書基礎基本講座(18) 千葉蒼玄



濃淡をつけ左を太く重く、右を渴筆で軽く仕上げる。



この文字の変化だけでも十分に、粗密、大小の変化はつけられるが、①の“者羅”でさらに変化をつけてみる。



上小・下大



太さを左に集中



④波良



⑤盤洛



⑥八羅

題名は“華”でも“花”でも“はな”でもよいが、あえて“K A”として造形に使った文字を連想させないようにすることがある。
印は左下に押した。

書道芸術院秋季展

書道芸術院役員・審査会員選抜・審査会員候補公募

会期
令和5年10月3日(火)～10月8日(日)
会場
セントラルミュージアム銀座
アートサロン毎日

秋季展実行委員長

後藤大峰

5類に移行したとはいえ、引き続き感染対策に注意し、今年も、書道芸術院秋季展がセントラルミュージアム銀座、及びアートサロン毎日で開催された。本年も、財団役員以下、審査会員選抜、新審査会員、さらに審査会員候補の公募による、秋季菊花賞、秋季俊英賞、全177点の作品がセントラルミュージアム銀座にて書道芸術院秋季展として、またアートサロン毎日において書道芸術院推薦作家展として14点展示された。

両会場とも、出品者それぞれの気力溢れる作品が並び熱氣すら感じられた。特に推薦作家展は次世代の審査会員の伸びやかで若々しい作品が輝きを見せ、充実という言葉に集約されていた。こ

れからの書道芸術院の扱い手として育つて行ってほしい。

7日(土)には審査会員候補による公募の表彰式および研究会が開催され、受賞者とともに多くの会員の参加を得、盛大にかつ、有意義な時間を過ごすことができた。また、今年は、4年振りに懇親会も企画され、久し振りに、役員、会員が和やかに親睦を深める光景が見られた。

最終日は、両展とともに午後5時に閉会し撤回作業も無事終了した。

観客数も例年を上回る結果となり、多くの方々に参觀を頂いたことは喜びであるとともに今後の活動の励みとなるだろう。

| | | | | | | |
|-----|------|------|------|------|------|------|
| 漢字 | 伊藤珠己 | 金澤峰雪 | 谷香翠香 | 鈴木美帆 | 坂本大槻 | 田中明苗 |
| かな | 小谷翠香 | 柳峰雪 | 半澤香艸 | 柳隆扇 | 正岡秀水 | 坂本金子 |
| 現詩 | 菅原香来 | 坂本桃翠 | 谷香来 | 菅原隆扇 | 三浦新村 | 田中美千 |
| 篆刻 | 塚田素朴 | 佐藤桃花 | 柳香艸 | 坂本素朴 | 樋口英樹 | 坂本泉翠 |
| 前衛 | 坂本熱海 | 佐藤美翠 | 柳香艸 | 柳如雲 | 山本翠芳 | 一葉明苗 |
| 辺見 | 坂井遊佐 | 佐藤恵美 | 坂井舟楓 | 坂井蒼風 | 龍堂英樹 | 大槻美千 |
| 萩原 | 坂井遊佐 | 塚田美翠 | 佐藤舟楓 | 佐藤蒼風 | 玉葉翠芳 | 田中泉翠 |
| 藤田 | 坂井遊佐 | 佐藤恵美 | 坂井舟楓 | 坂井蒼風 | 新村一葉 | 坂本明苗 |
| 芳紅 | 坂井遊佐 | 塚田美翠 | 佐藤舟楓 | 佐藤蒼風 | 山本英樹 | 大槻泉翠 |
| 香園 | 坂井遊佐 | 佐藤恵美 | 坂井舟楓 | 坂井蒼風 | 樋口翠芳 | 田中美千 |
| 絆雪 | 坂井遊佐 | 佐藤美翠 | 坂井舟楓 | 坂井蒼風 | 山本英樹 | 坂本泉翠 |
| 糾筋 | 坂井遊佐 | 佐藤恵美 | 坂井舟楓 | 坂井蒼風 | 龍堂翠芳 | 大槻明苗 |
| 芙蓉 | 坂井遊佐 | 佐藤美翠 | 坂井舟楓 | 坂井蒼風 | 玉葉翠芳 | 田中美千 |
| 香風 | 坂井遊佐 | 佐藤恵美 | 坂井舟楓 | 坂井蒼風 | 新村一葉 | 坂本泉翠 |
| 淡虹 | 坂井遊佐 | 佐藤美翠 | 坂井舟楓 | 坂井蒼風 | 山本英樹 | 大槻明苗 |
| 新井 | 坂井遊佐 | 佐藤恵美 | 坂井舟楓 | 坂井蒼風 | 樋口翠芳 | 田中美千 |
| 虹雪 | 坂井遊佐 | 佐藤美翠 | 坂井舟楓 | 坂井蒼風 | 山本英樹 | 坂本泉翠 |
| 佐々木 | 坂井遊佐 | 佐藤恵美 | 坂井舟楓 | 坂井蒼風 | 龍堂翠芳 | 大槻明苗 |
| 紅楓 | 坂井遊佐 | 佐藤美翠 | 坂井舟楓 | 坂井蒼風 | 玉葉翠芳 | 田中美千 |
| 藤崎 | 坂井遊佐 | 佐藤恵美 | 坂井舟楓 | 坂井蒼風 | 新村一葉 | 坂本泉翠 |
| 中嶋 | 坂井遊佐 | 佐藤美翠 | 坂井舟楓 | 坂井蒼風 | 山本英樹 | 大槻明苗 |
| 佐藤 | 坂井遊佐 | 佐藤恵美 | 坂井舟楓 | 坂井蒼風 | 樋口翠芳 | 田中美千 |
| 玲子 | 坂井遊佐 | 佐藤美翠 | 坂井舟楓 | 坂井蒼風 | 山本英樹 | 坂本泉翠 |
| 伏津 | 坂井遊佐 | 佐藤恵美 | 坂井舟楓 | 坂井蒼風 | 龍堂翠芳 | 大槻明苗 |
| 芳瑤 | 坂井遊佐 | 佐藤美翠 | 坂井舟楓 | 坂井蒼風 | 玉葉翠芳 | 田中美千 |

秋季展公募入賞者

◇秋季菊花賞(10名)

本誌特集ページ(P8・9)に名前と作品を掲載しました。

◇秋季俊英賞(41名)



会場風景

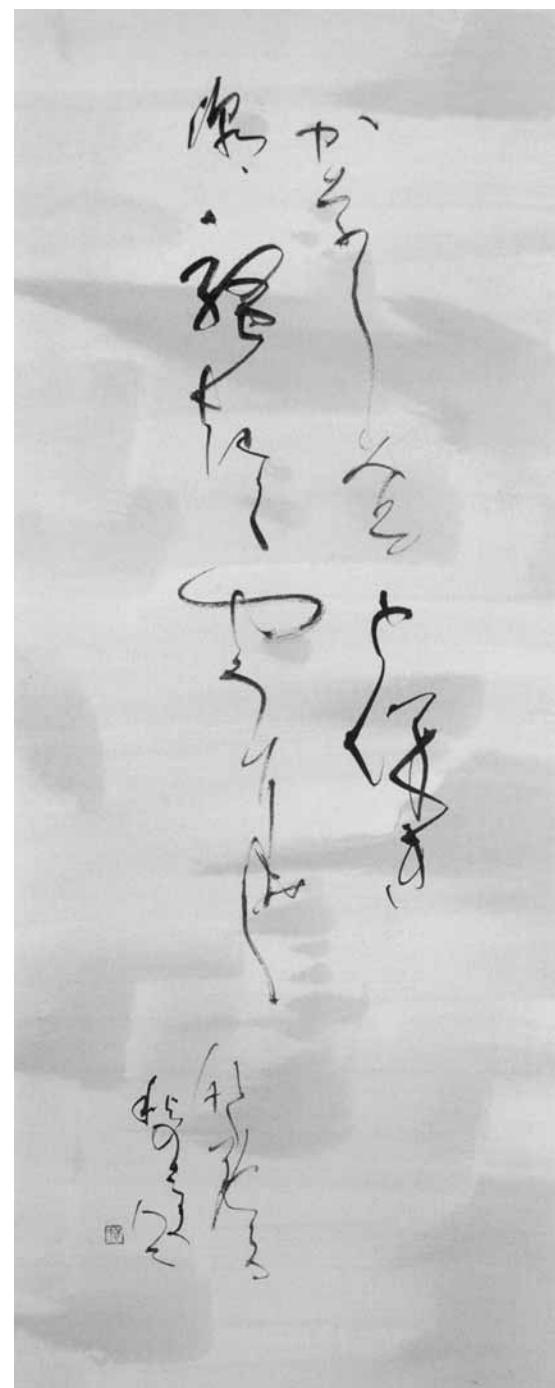
2023年 書道芸術院秋季展公募出品集計

| 部 | 出品点数 | 出品人数 | 秋季菊花賞 | 秋季俊英賞 | 選外 |
|-------|------|------|-------|-------|-----|
| 漢字 | 116 | 71 | 4 | 16 | 51 |
| かな | 5 | 5 | 0 | 1 | 4 |
| 現代詩文書 | 78 | 49 | 3 | 11 | 35 |
| 篆刻・刻字 | 2 | 2 | 0 | 1 | 1 |
| 前衛書 | 104 | 54 | 3 | 12 | 39 |
| 合計 | 305 | 181 | 10 | 41 | 130 |

書道芸術院秋季展

会期 令和5年10月3日(火)～10月8日(日)

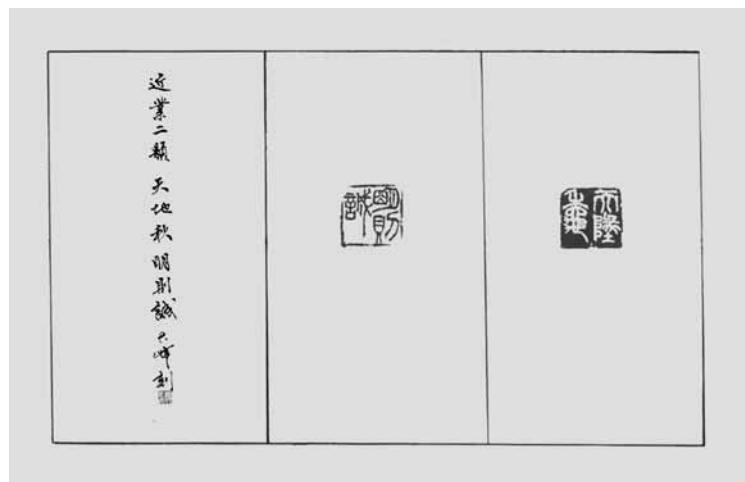
会場 セントラルミュージアム銀座(紙パルプ会館)



〈秋のみぎは〉

(公財) 常任総務・理事長 下谷洋子

150×60cm



〈近業二顆〉(公財) 常任總務・常務理事 後 藤 大 峰 70×100cm



〈案山子〉



180×60cm



〈遠〉

新井 春麗 90×120cm

審査会員候補
秋季菊花賞



〈望〉

岡田 薫雪

121×91cm



〈夏の夜に〉

遠藤 和香

178×61cm



奥川 麗流

114×88cm

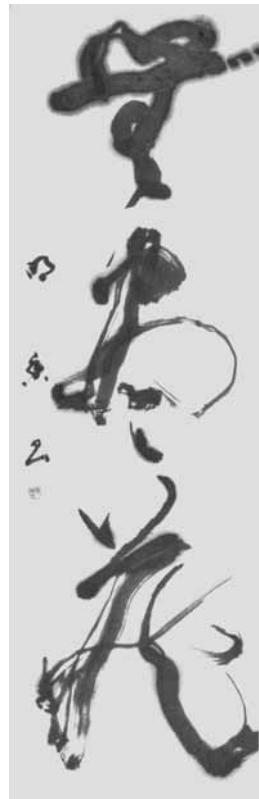
〈それから静寂の時〉



大友 汐苑

181×61cm

〈無尽藏〉



166×53cm

〈心〉



佐藤成美

〈对峰〉



荒谷明美

152×71cm

〈題義公禪房〉



深田幽春

180×55cm



〈仮の世〉

前田花峰 57×176cm

〈併催〉「書道芸術院推薦作家」展

会期 令和5年10月3日(火)～10月8日(日)

会場 アートサロン毎日(竹橋・パレスサイドビル1F)

華清宮



佐伯哲哉



大山和歌子

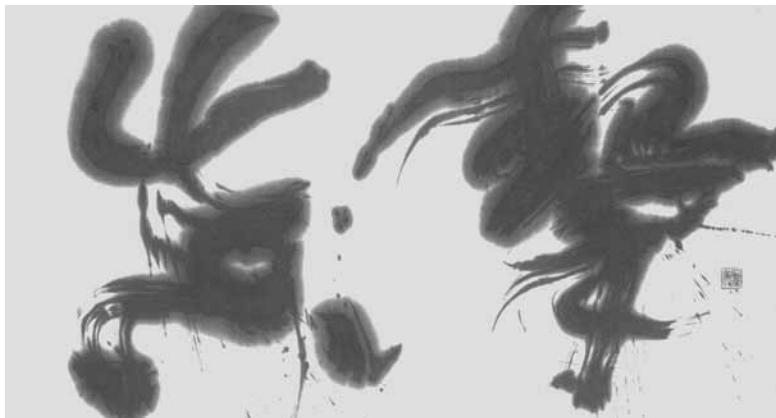
鳥聲

《岡村恵窓》



情熱

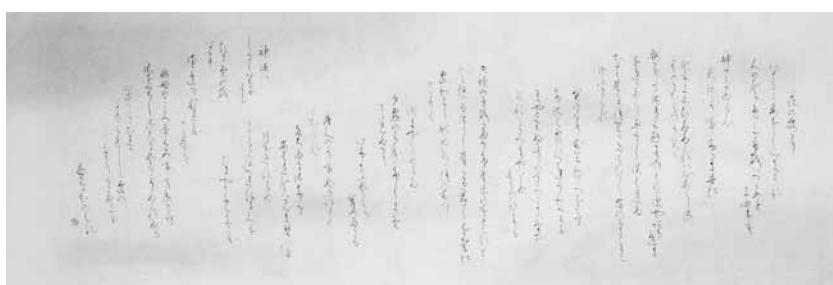
《藤原聖美》



〈真摯〉

95×180cm

《京絹子》



〈花の枝に〉

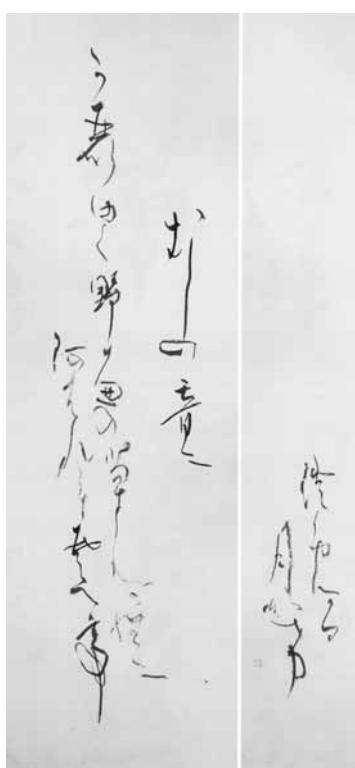
60×178cm

《森田藤谷》



175×38cm (3枚)

《澄める月かげ》



《篠田祐子》

180×84cm

《七言一句》



〈朝吹英和の句〉



178×58cm

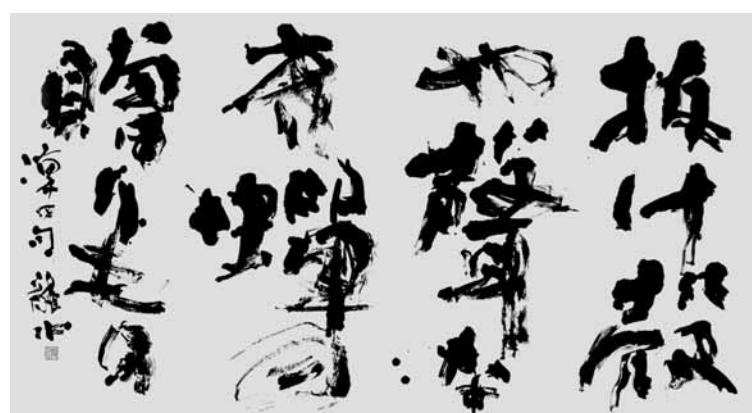
〈及川 豊流〉



〈種田山頭火の句〉

90×120cm

《坂本龍水》



〈凜の句〉

97×177cm

《小林古径》



〈一山百樂〉

50×155cm

〈プリズム〉



《高原梨秀》

〈喜〉



《門脇信子》

〈やまない雨〉



《木暮千晶》

九成宮醴泉銘(唐・歐陽詢) ②

特別研究部臨書課題

II (A、大作の部 每日晨起筆貰、會サイズ以内 2×6尺・金紙も可)(B、小品の部、一切以上切以内、金紙以外も可)(A、B縦書き用)



(三井記念美術館蔵)

(掲載図版・80%に縮小)

〈解説〉
九成宮醴泉銘の臨書のポイントは、

①字形は背勢で、線は直線を意識する。

②縦横の点画は、それぞれ等間隔となる。

③縦線は太く、横線は細く、が原則。

④原則として、穂先は横画なら線の上部、縦画なら左側を通る。

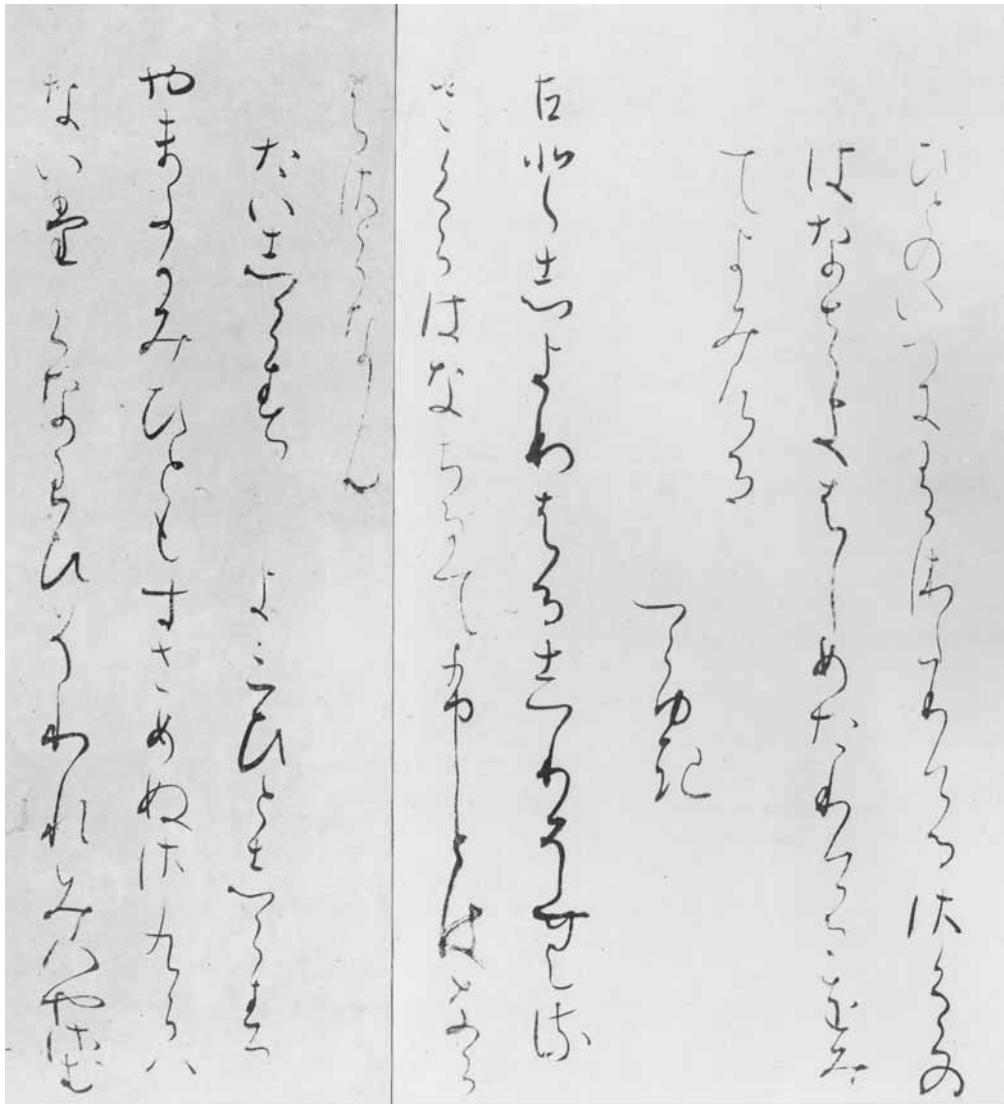
⑤縦線と横線がくつつく場合と離れる場合がある。などである。ただし、原本を細かく見ると、ひとつ線でも微妙な太細の変化があり、それは穂先の位置や筆圧のかけ方の結果であることを理解したい。拓本の白い線は無機質に見えるが、筆の動きを想像しながら観察すると、様々なことが分かってくるものである。

(編集部)

王者刑殺當罪。賞錫當功。得禮之宜則醴泉出於闕庭。鶻冠子

※古典・古筆とともに本院ホームページから動画が見られます。(QRコードはP.55です)

※落款を必ず入れる。署名もしくは〇〇臨(押印のみ可)



（解説）関戸本古今集の書風は、

ひとのいへにうゑたりけるさくらの
支者利介佐久

はなさきはじめたりけるをみ
てよみける

つらゆき起

古筆志利者志利無流

ことしよりはるしりそむる

さくらばなちるてふことはなら
者佐奈无む

はざらなむ

だい志らずよみひとしらす

やまたかみひともすまめぬさくらば
佐久

ないたま久王■わびそわれみはやさむ

解説）関戸本古今集の書風は、

①字形の美しさと行立ての自然さ。

②自由で変化に富んだ流動的な用筆法。

③線質に厚みがあるが重くは見えない。

④ところどころ、俯仰法が見える。
などが特徴として挙げられる。

構成は上掲の貫之の歌のようゆつたりとした3行書きが多い。その次の読人知らずの歌は、直後に歌句の異同を示す左注を細かく入れることを意識したためか、2行書きとなっている。

この2行書きは恋歌の部に多用されるが、字粒が小さくなることで、よりリズミカルな動きを見せてくれる。

（編集部）

※落款を必ず入れる。署名、もしくは〇〇臨（押印のみ也可）

かな研究部臨書課題

（半紙普通判（料紙可）・縦長に使用）別紙を裁断して貼付も可。半懐紙は半紙サイズに切って使用のこと。上記の古筆の掲載部分より歌一首以上を書く。（全臨も可）

特別研究部臨書課題

A. 大作の部=毎日展審査会員・会員サイズ以内、2×6尺・全紙も可
B. 小品の部=半切以上、半切以内（縦横自由）・全紙以内も可
<いずれも上記の掲載以外も可。>

※古筆は原寸（以上も可）で臨書じ
※掲載図版・70%に縮小
（P.52）
※古筆は原寸（以上も可）で臨書じ
※掲載図版・70%に縮小
（P.52）
※古筆は原寸（以上も可）で臨書じ
※掲載図版・70%に縮小
（P.52）

小浜大明

望月樓高太清
(王昌齡)

月を望む樓高く太だ清し

月を眺める楼は高く、また清ら
かである。

先月に続いて、もう一度隸書を
書いてみました。特に注意してほ
しいのは、右肩の転折は必ず一度
筆を離してから、次の縦画は下か
ら上に突き上げます(逆入)。横画
の終筆は軽くつり上げ抜いていき
ます(平出)。分かり切ったことだ
と思う方も多いかもしませんが、
あえて書きました。

〈参考〉

望月樓
高太清

大明

望月樓高太清

よみ
(月を望む樓高く太だ清し)

書体=自由



習い方解説 (2)

西川翠嵐

仁者樂山
（「論語」雍也）
（仁者は山を楽しむ）

「徳のある者は、心穏やかでゆったりとしているので、おのずから山を愛するものだ。」



書体＝楷書

書の世界では漢字の部といいましても「楷、行、草、篆、隸」の五体があります。初学の方にはまず「蘭亭序」のような行書がよいでしょう。毛筆の特性を生かした無理のない筆遣いで、大切なことがすべて含まれているからです。私は、まだ学生だった頃は篆書が一番むずかしい書体ではないかと今は思っております。行草書では線質のゆれや文字の傾きは、かえって効果を生む要素ともなりますが、楷書ではそれがゆるされません。

楷書ではそれがあくまで線と線の間隔をそろえ、縦画横画の角度も一定に保たなければなりません。一画一画も大切ですが、全体を通して安定感が出せるよう努力して下さい。

松村くに子

西吹けば東にたまる落葉かな
(与謝蕪村)

西吹けば

ひや
たまる落葉かな

参考

西風が吹くと落葉は、東側に寄せられる。東風が吹けば西側にたまる。自然の理のごとく落葉は動いて行く。自分もかくありたいと思う、作者の心情がうかがえます。

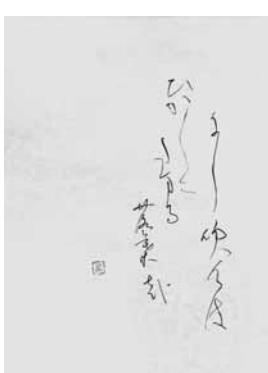
1、2行の行間を大きくあけて、落葉が移動した後の情景を表現しました。

効果的な余白を作るのは、むずかしいですが重要です。行をいろいろに動かし、試してみて下さい。左の参考作品は、文字群を片側に寄せ大胆な余白を取ってみました。この場合、印の位置には工夫が必要です。

よみ方 西吹け(希)ば(八)東(ひがし)に(一)たまる落葉か(可)な(那) 蕪村の句を

創作

* 料紙は半紙版(30.0×24.5cm)を使用しましょう。



名 越 蒼 竹



玉樓傾側粉牆空

（玉樓傾側して粉牆空し。）

（王建）

（玉樓傾側して粉牆空し。重疊たる青山故宮を遠る。）

書体＝自由

傅山の書はざるざると、線をつなげて書いているようで、一見単調に感じられます。癖が単純だとしたらマネも簡単だと思いますが、案外創作につなげるのは難しく、肉筆でしかその良さが掴みにくのかかもしれません。ただ連綿とよく観察すると、線の交差とそれによって囲まれる空間の美に神経を遣っているように見えます。

漢字条幅規定 秀級以下 【12月10日締めきり】 用紙 小画仙紙半切

飯沼恵鳳選書

習い方解説 (2)

飯 沼 恵 鳳

漢字条幅規定 秀級以下 【12月10日締めきり】 用紙 小画仙紙半切

（王建）



惠鳳書

書体＝自由

（性静かなる者は寿考多し。）
（鮑照）

④左右の払いに波立つ波磔がある

⑤転折は別画として書く

等。用筆法を習得してほしいです。
注…「考」は「老」と同じ意味。

今日は、隸書体で書きました。
大意は「心性の静かな者は長寿が多い」です。筆は細めの長峰で濃墨を使用しました。隸書の特徴は、

①字形が扁平

②起筆は藏鋒・逆筆、送筆は中鋒
③横画は概ね水平、縦画は総じて垂直

習い方解説 (2)

倉林紅瑠

唱歌「庭の千草」は明治17年(1884)「小学唱歌集」に収められ広く親しまれました。里見義作詞、原曲はアイルランド民謡「夏の名残のばら」で、歌には野菊のよう強く生きるという思いがこめられています。

◇「平がな」の基本——単体——

パソコンやスマホの普及を受けてペンや鉛筆で文字を書く機会が少なくなりました。

しかし親しい人、大切な人に手紙を書くときなどには自分の手で、美しく整った文字を書きたいと思うものです。そんな場面を想像しながら平がなの基本を学んでください。

平がなは平安時代の中期に漢字の草書から生まれました。その一字一字を単体といいます。今日の実用面における平がなの学習は、平安時代の古筆「高野切第三種」「粘葉本和漢朗詠集」などからその基本形を学ぶことをすすめます。今月の参考本には、二字連綿が含まれますが、連綿については次号から解説します。

庭の千草もむしのねも
かれてさびしくなりにけり
ああしらぎく 鳴呼白菊
ひとりおくれて さきにけり

庭の千草より 紅瑠書

書体=自由

△用紙 ハガキ大(14.8×10cm)の白紙を使用
△黒インクのペンを使用(ボールペン・フェルトペン可)

用紙の大きさにばらつきが見られます。
用紙サイズ(ハガキ大14.8×10cm)を守って下さい。

〈注〉「鳴」のつくりは「鳥」ではなく「鳥(からす)」です。ご注意下さい。

庭の千草も むしのねも
かれてさびしく なりにけり
ああしらぎく 鳴呼白菊
ひとりおくれて さきにけり

「庭の千草」より ○○書

寿 御歳暮 祝御入学 お年賀
寿 沢歳暮 祝御入学 お年賀
お見舞 お車代 御香典 金参万円也
お見舞 お車代 御香典 金参万円也

岩垣若翠

今月の

ホープ作品
各部総評

No. 749

ペン字部 師範 加瀬明日夏
引き締まった筆線が大変魅力ある作品で秀逸。漢字かなの調和も端正に表現され鍊度高い作に敬服。

◎ペン字部總評 秋の気配を感じ静謐なひとときの中書作された情景が浮かぶ。誤字なく安定の作多数。楽しく拝見しました。(雪舟評)

秋の夕日に照る山紅葉
濃いも薄いも數ある中に
松をいろどる楓や草は
かのふりとの裾模様

紅葉 よう 明日書

かな条幅部 四段 田畑寿美子
やや小振りだが、歯切れのよいリズムで運筆の抑揚も快い。墨色への配慮とともに品よく仕上がる。

◎かな条幅部總評 俳句は多少の大胆さも必要だが、過剰は見苦しい。変体がな良の認識不足や、筋のようないしは一考を。(洋子評)



現代詩文書部 特選 平間 翠里

穂やかな構成、深く沈みこんだ潤筆線・骨力ある強靭な渴筆線が紙面全体を見事に支える。

◎現代詩文書部總評 多様な構成、見事な空間処理に感服。半面誤字と思しき字散見。残念。(無極評)



前衛書部 特選 梅山 久子

大胆に紙面を切り裂く線は、ストレートで強靭である。上部の力

強い斜線が全体を引き締めた。

◎前衛書部總評 多様な表現効果を駆使する余り、オーバー表現の作品が見られたので注意。(蓮紅評)



漢字条幅部 師範 加瀬明日夏
呉譜之風の長脚小篆。筆法着実

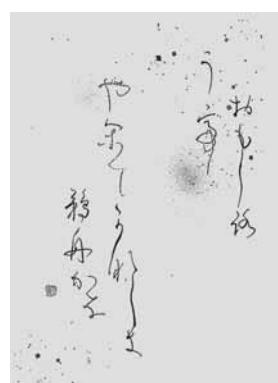
で、線がすつきりとして暢ひやか。字形も端止。真摯な学書の成果。

◎漢字条幅部總評 上級は篆書作品に字形、筆法が未熟な作が多見。異なる練習を。下級は潤渴変化し纏まとった作が多かった。(萬城評)



かな部 師範 小林 嘉江
かな魅力を全て、さりげなく盛り込んだ力量は見事。創りすぎない創造力を自覚してのことか? についてきて違和感を感じさせる作が激減してきた。さらには個性の表現を目指すよう望む。(明子評)

◎かな部總評 概ね俳句表現が身についてきた。作が激減してきた。さらには個性の表現を目指すよう望む。(明子評)



漢字部 師範 三浦 英樹

木簡を基調とした作。長い2本の縦画の処理と瞬発力のある横画

が一体となった奔放さが見事。

◎漢字部總評 作品制作には氣力の充実が大切。制成品図を十分整理したうえで原稿を熟成してとりかかってほしい。

(石雲評)

実用書優秀作品

選評 片岡豪峰

◎実用書部総評

実用書は全体構成に安定した表現力が求められる。また、漢字とかなのバランスも重要であり、基本的な文字構成力が試される。

(豪峰評)

特選 多胡三千代
行の中心が通り、のびやかで流麗な表現が全体を効果的にみせる。

菊月 秋彼岸 重陽の節句
菊月 秋彼岸 重陽の節句
野分の後の青空と涼やかな風
野分の後の青空と涼やかな風
多胡三千代

特選 安藤叙孝
穏やかで丁寧な書きぶりに好感がもてる。余白もきれいに仕上がる。

菊月 秋彼岸 重陽の節句
菊月 秋彼岸 重陽の節句
野分の後の青空と涼やかな風
野分の後の青空と涼やかな風
安藤叙孝

| | | | | | | | | | | | |
|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|-----|-------|
| 堂玉 | 春清 | 四高 | 紅瑠 | 華桜 | 春紅 | 千葉 | 若大 | こだ | 亀松 | 千葉 | 深大 |
| 光川 | 月光 | 枝真 | 瑠璃 | 仙草 | 汀瑠 | 葉 | 大雲 | こだ | 亀松 | 八街 | 伊呂 |
| 佐佐 | 佐林 | 小岩 | 相澤 | 柳苗 | 中丹 | 竹浪 | 北山 | 爪 | 池田 | 井ノ口 | 安藤三千代 |
| 佐藤 | 佐木 | 奥川 | 上林 | 瀬代 | 中山 | 嶋 | 鷺山 | 爪 | 工藤 | 春峰 | 叙孝 |
| 光綾 | 綾奈 | 志江 | 麗子 | 郁子 | 知佳 | 恵美 | 梢直 | 子 | 英晴 | 有里 | 峰代 |
| 耀 | 耀 | 子江 | 江 | 秀華 | 恵子 | 舟 | 和 | | 房山 | 惠 | 紫 |
| 秀 | 書 | 梓江 | 游江 | 雲雀 | 附中 | 大雲 | 土大 | たか | 竹美 | 紅瑠 | 佑朋 |
| 歌 | 詩 | 文江 | 江筆 | 秀苑 | 中 | 附中 | 太白 | うる | 洞雀 | 大雲 | 森地 |
| 作 | 詞 | 梓 | 雀 | 附 | 中 | 太白 | 浮 | 今井 | 美 | 松永 | 東平 |
| 佳 | 作 | 文 | 雀 | 中 | 中 | 太白 | 須 | 上井 | 竹 | 廣田 | 島 |
| 佐 | 佐 | 林 | 谷 | 中 | 中 | 太白 | 関 | 秋山 | 横山 | 福原 | 中 |
| 佐藤 | 佐木 | 林 | 谷 | 中 | 中 | 太白 | 井 | 秋山 | 山 | 有里 | 島 |
| 光 | 綾奈 | 志江 | 麗子 | 郁子 | 知佳 | 恵美 | 梢直 | 子 | 蘭舟 | 香秋 | 藤邑 |
| 綾 | 耀 | 志江 | 麗子 | 郁子 | 恵子 | 舟 | 和 | | 蘭舟 | 香秋 | 惠風 |
| 耀 | 耀 | 子江 | 江 | 秀華 | 恵子 | 舟 | 和 | | 蘭舟 | 香秋 | 紫 |
| 秀 | 歌 | 梓 | 游 | 雲雀 | 附 | 大雲 | 土大 | たか | 竹美 | 紅瑠 | 佑朋 |
| 歌 | 詞 | 文 | 江 | 秀苑 | 中 | 附中 | 太白 | うる | 洞雀 | 大雲 | 森地 |
| 作 | 詞 | 梓 | 江 | 附 | 中 | 太白 | 浮 | 今井 | 美 | 松永 | 東平 |
| 作 | 詞 | 文 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 須 | 上井 | 竹 | 廣田 | 島 |
| 作 | 詞 | 梓 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 關 | 秋山 | 横山 | 福原 | 中 |
| 作 | 詞 | 文 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 井 | 秋山 | 山 | 有里 | 島 |
| 作 | 詞 | 梓 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 浮 | 今井 | 蘭舟 | 香秋 | 藤邑 |
| 作 | 詞 | 文 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 須 | 上井 | 蘭舟 | 香秋 | 惠風 |
| 作 | 詞 | 梓 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 關 | 秋山 | 蘭舟 | 香秋 | 紫 |
| 作 | 詞 | 文 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 井 | 秋山 | 蘭舟 | 香秋 | 佑朋 |
| 作 | 詞 | 梓 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 浮 | 今井 | 蘭舟 | 香秋 | 森地 |
| 作 | 詞 | 文 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 須 | 上井 | 蘭舟 | 香秋 | 東平 |
| 作 | 詞 | 梓 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 關 | 秋山 | 蘭舟 | 香秋 | 島 |
| 作 | 詞 | 文 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 井 | 秋山 | 蘭舟 | 香秋 | 福原 |
| 作 | 詞 | 梓 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 浮 | 今井 | 蘭舟 | 香秋 | 有里 |
| 作 | 詞 | 文 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 須 | 上井 | 蘭舟 | 香秋 | 惠風 |
| 作 | 詞 | 梓 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 關 | 秋山 | 蘭舟 | 香秋 | 紫 |
| 作 | 詞 | 文 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 井 | 秋山 | 蘭舟 | 香秋 | 佑朋 |
| 作 | 詞 | 梓 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 浮 | 今井 | 蘭舟 | 香秋 | 森地 |
| 作 | 詞 | 文 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 須 | 上井 | 蘭舟 | 香秋 | 東平 |
| 作 | 詞 | 梓 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 關 | 秋山 | 蘭舟 | 香秋 | 島 |
| 作 | 詞 | 文 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 井 | 秋山 | 蘭舟 | 香秋 | 福原 |
| 作 | 詞 | 梓 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 浮 | 今井 | 蘭舟 | 香秋 | 有里 |
| 作 | 詞 | 文 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 須 | 上井 | 蘭舟 | 香秋 | 惠風 |
| 作 | 詞 | 梓 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 關 | 秋山 | 蘭舟 | 香秋 | 紫 |
| 作 | 詞 | 文 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 井 | 秋山 | 蘭舟 | 香秋 | 佑朋 |
| 作 | 詞 | 梓 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 浮 | 今井 | 蘭舟 | 香秋 | 森地 |
| 作 | 詞 | 文 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 須 | 上井 | 蘭舟 | 香秋 | 東平 |
| 作 | 詞 | 梓 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 關 | 秋山 | 蘭舟 | 香秋 | 島 |
| 作 | 詞 | 文 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 井 | 秋山 | 蘭舟 | 香秋 | 福原 |
| 作 | 詞 | 梓 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 浮 | 今井 | 蘭舟 | 香秋 | 有里 |
| 作 | 詞 | 文 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 須 | 上井 | 蘭舟 | 香秋 | 惠風 |
| 作 | 詞 | 梓 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 關 | 秋山 | 蘭舟 | 香秋 | 紫 |
| 作 | 詞 | 文 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 井 | 秋山 | 蘭舟 | 香秋 | 佑朋 |
| 作 | 詞 | 梓 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 浮 | 今井 | 蘭舟 | 香秋 | 森地 |
| 作 | 詞 | 文 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 須 | 上井 | 蘭舟 | 香秋 | 東平 |
| 作 | 詞 | 梓 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 關 | 秋山 | 蘭舟 | 香秋 | 島 |
| 作 | 詞 | 文 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 井 | 秋山 | 蘭舟 | 香秋 | 福原 |
| 作 | 詞 | 梓 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 浮 | 今井 | 蘭舟 | 香秋 | 有里 |
| 作 | 詞 | 文 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 須 | 上井 | 蘭舟 | 香秋 | 惠風 |
| 作 | 詞 | 梓 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 關 | 秋山 | 蘭舟 | 香秋 | 紫 |
| 作 | 詞 | 文 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 井 | 秋山 | 蘭舟 | 香秋 | 佑朋 |
| 作 | 詞 | 梓 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 浮 | 今井 | 蘭舟 | 香秋 | 森地 |
| 作 | 詞 | 文 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 須 | 上井 | 蘭舟 | 香秋 | 東平 |
| 作 | 詞 | 梓 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 關 | 秋山 | 蘭舟 | 香秋 | 島 |
| 作 | 詞 | 文 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 井 | 秋山 | 蘭舟 | 香秋 | 福原 |
| 作 | 詞 | 梓 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 浮 | 今井 | 蘭舟 | 香秋 | 有里 |
| 作 | 詞 | 文 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 須 | 上井 | 蘭舟 | 香秋 | 惠風 |
| 作 | 詞 | 梓 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 關 | 秋山 | 蘭舟 | 香秋 | 紫 |
| 作 | 詞 | 文 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 井 | 秋山 | 蘭舟 | 香秋 | 佑朋 |
| 作 | 詞 | 梓 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 浮 | 今井 | 蘭舟 | 香秋 | 森地 |
| 作 | 詞 | 文 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 須 | 上井 | 蘭舟 | 香秋 | 東平 |
| 作 | 詞 | 梓 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 關 | 秋山 | 蘭舟 | 香秋 | 島 |
| 作 | 詞 | 文 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 井 | 秋山 | 蘭舟 | 香秋 | 福原 |
| 作 | 詞 | 梓 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 浮 | 今井 | 蘭舟 | 香秋 | 有里 |
| 作 | 詞 | 文 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 須 | 上井 | 蘭舟 | 香秋 | 惠風 |
| 作 | 詞 | 梓 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 關 | 秋山 | 蘭舟 | 香秋 | 紫 |
| 作 | 詞 | 文 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 井 | 秋山 | 蘭舟 | 香秋 | 佑朋 |
| 作 | 詞 | 梓 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 浮 | 今井 | 蘭舟 | 香秋 | 森地 |
| 作 | 詞 | 文 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 須 | 上井 | 蘭舟 | 香秋 | 東平 |
| 作 | 詞 | 梓 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 關 | 秋山 | 蘭舟 | 香秋 | 島 |
| 作 | 詞 | 文 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 井 | 秋山 | 蘭舟 | 香秋 | 福原 |
| 作 | 詞 | 梓 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 浮 | 今井 | 蘭舟 | 香秋 | 有里 |
| 作 | 詞 | 文 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 須 | 上井 | 蘭舟 | 香秋 | 惠風 |
| 作 | 詞 | 梓 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 關 | 秋山 | 蘭舟 | 香秋 | 紫 |
| 作 | 詞 | 文 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 井 | 秋山 | 蘭舟 | 香秋 | 佑朋 |
| 作 | 詞 | 梓 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 浮 | 今井 | 蘭舟 | 香秋 | 森地 |
| 作 | 詞 | 文 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 須 | 上井 | 蘭舟 | 香秋 | 東平 |
| 作 | 詞 | 梓 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 關 | 秋山 | 蘭舟 | 香秋 | 島 |
| 作 | 詞 | 文 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 井 | 秋山 | 蘭舟 | 香秋 | 福原 |
| 作 | 詞 | 梓 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 浮 | 今井 | 蘭舟 | 香秋 | 有里 |
| 作 | 詞 | 文 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 須 | 上井 | 蘭舟 | 香秋 | 惠風 |
| 作 | 詞 | 梓 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 關 | 秋山 | 蘭舟 | 香秋 | 紫 |
| 作 | 詞 | 文 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 井 | 秋山 | 蘭舟 | 香秋 | 佑朋 |
| 作 | 詞 | 梓 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 浮 | 今井 | 蘭舟 | 香秋 | 森地 |
| 作 | 詞 | 文 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 須 | 上井 | 蘭舟 | 香秋 | 東平 |
| 作 | 詞 | 梓 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 關 | 秋山 | 蘭舟 | 香秋 | 島 |
| 作 | 詞 | 文 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 井 | 秋山 | 蘭舟 | 香秋 | 福原 |
| 作 | 詞 | 梓 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 浮 | 今井 | 蘭舟 | 香秋 | 有里 |
| 作 | 詞 | 文 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 須 | 上井 | 蘭舟 | 香秋 | 惠風 |
| 作 | 詞 | 梓 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 關 | 秋山 | 蘭舟 | 香秋 | 紫 |
| 作 | 詞 | 文 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 井 | 秋山 | 蘭舟 | 香秋 | 佑朋 |
| 作 | 詞 | 梓 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 浮 | 今井 | 蘭舟 | 香秋 | 森地 |
| 作 | 詞 | 文 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 須 | 上井 | 蘭舟 | 香秋 | 東平 |
| 作 | 詞 | 梓 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 關 | 秋山 | 蘭舟 | 香秋 | 島 |
| 作 | 詞 | 文 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 井 | 秋山 | 蘭舟 | 香秋 | 福原 |
| 作 | 詞 | 梓 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 浮 | 今井 | 蘭舟 | 香秋 | 有里 |
| 作 | 詞 | 文 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 須 | 上井 | 蘭舟 | 香秋 | 惠風 |
| 作 | 詞 | 梓 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 關 | 秋山 | 蘭舟 | 香秋 | 紫 |
| 作 | 詞 | 文 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 井 | 秋山 | 蘭舟 | 香秋 | 佑朋 |
| 作 | 詞 | 梓 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 浮 | 今井 | 蘭舟 | 香秋 | 森地 |
| 作 | 詞 | 文 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 須 | 上井 | 蘭舟 | 香秋 | 東平 |
| 作 | 詞 | 梓 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 關 | 秋山 | 蘭舟 | 香秋 | 島 |
| 作 | 詞 | 文 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 井 | 秋山 | 蘭舟 | 香秋 | 福原 |
| 作 | 詞 | 梓 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 浮 | 今井 | 蘭舟 | 香秋 | 有里 |
| 作 | 詞 | 文 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 須 | 上井 | 蘭舟 | 香秋 | 惠風 |
| 作 | 詞 | 梓 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 關 | 秋山 | 蘭舟 | 香秋 | 紫 |
| 作 | 詞 | 文 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 井 | 秋山 | 蘭舟 | 香秋 | 佑朋 |
| 作 | 詞 | 梓 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 浮 | 今井 | 蘭舟 | 香秋 | 森地 |
| 作 | 詞 | 文 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 須 | 上井 | 蘭舟 | 香秋 | 東平 |
| 作 | 詞 | 梓 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 關 | 秋山 | 蘭舟 | 香秋 | 島 |
| 作 | 詞 | 文 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 井 | 秋山 | 蘭舟 | 香秋 | 福原 |
| 作 | 詞 | 梓 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 浮 | 今井 | 蘭舟 | 香秋 | 有里 |
| 作 | 詞 | 文 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 須 | 上井 | 蘭舟 | 香秋 | 惠風 |
| 作 | 詞 | 梓 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 關 | 秋山 | 蘭舟 | 香秋 | 紫 |
| 作 | 詞 | 文 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 井 | 秋山 | 蘭舟 | 香秋 | 佑朋 |
| 作 | 詞 | 梓 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 浮 | 今井 | 蘭舟 | 香秋 | 森地 |
| 作 | 詞 | 文 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 須 | 上井 | 蘭舟 | 香秋 | 東平 |
| 作 | 詞 | 梓 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 關 | 秋山 | 蘭舟 | 香秋 | 島 |
| 作 | 詞 | 文 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 井 | 秋山 | 蘭舟 | 香秋 | 福原 |
| 作 | 詞 | 梓 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 浮 | 今井 | 蘭舟 | 香秋 | 有里 |
| 作 | 詞 | 文 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 須 | 上井 | 蘭舟 | 香秋 | 惠風 |
| 作 | 詞 | 梓 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 關 | 秋山 | 蘭舟 | 香秋 | 紫 |
| 作 | 詞 | 文 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 井 | 秋山 | 蘭舟 | 香秋 | 佑朋 |
| 作 | 詞 | 梓 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 浮 | 今井 | 蘭舟 | 香秋 | 森地 |
| 作 | 詞 | 文 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 須 | 上井 | 蘭舟 | 香秋 | 東平 |
| 作 | 詞 | 梓 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 關 | 秋山 | 蘭舟 | 香秋 | 島 |
| 作 | 詞 | 文 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 井 | 秋山 | 蘭舟 | 香秋 | 福原 |
| 作 | 詞 | 梓 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 浮 | 今井 | 蘭舟 | 香秋 | 有里 |
| 作 | 詞 | 文 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 須 | 上井 | 蘭舟 | 香秋 | 惠風 |
| 作 | 詞 | 梓 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 關 | 秋山 | 蘭舟 | 香秋 | 紫 |
| 作 | 詞 | 文 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 井 | 秋山 | 蘭舟 | 香秋 | 佑朋 |
| 作 | 詞 | 梓 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 浮 | 今井 | 蘭舟 | 香秋 | 森地 |
| 作 | 詞 | 文 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 須 | 上井 | 蘭舟 | 香秋 | 東平 |
| 作 | 詞 | 梓 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 關 | 秋山 | 蘭舟 | 香秋 | 島 |
| 作 | 詞 | 文 | 江 | 中 | 中 | 太白 | 井 | 秋山 | 蘭舟 | 香秋 | 福原 |
| 作 | 詞 | 梓 | 江 | 中 | 中 | | | | | | |

前衛書部（特選）



現 代 詩 文 書 部 (特選)

| | |
|----|----------------------------|
| 智子 | 立体感ある線の動き見事 伸びやかな動線が明るい |
| 子 | 躍動感ある力強い運筆 |
| 翠 | 淡墨の滲みと軽妙さ一致 |
| 子 | 潤渴の組合せと線が絶妙 |
| 雪 | 宿墨の立体感と墨色美 |
| 香 | 穏やかな潤筆と細線融合 |
| 媛 | 優雅に漂う線にリズム有 |
| 子 | 力強い躍動感溢れる作 |
| 美 | 多様な曲線構成と余白美 |

選評 太田蓮紅

菁華洋帆定佳子潤渴折込んだ線勁く流麗
喜代美温雅な線で朴訥さが籠る

恭山房子 気宇雄大筆勢に氣迫感ず
藤香谷 墨色、味わいある線流麗
和香 漸度高く渴筆線が見事
沈着した線に気魄が籠る

京仙
筆勢が活き躍動感溢れる
紙面を見事に捉えた作

選評 佐藤無極
芳美祥舟博
永舟梢淡々とした味わい深い作
骨力ある線が紙面を躍る
強韌な細線が紙面を舞う

選評佐藤無極

大作の部

現代詩文書（八戸）市川紫泉 「石川不二子の歌」



180×60cm



180×60cm

前衛書
（篤信）三浦朱鳳 「生きる」

市川紫泉書

◆雪と風の見事なバランス、太く重厚な線に渴筆の細線の冴えがきわだっている。モダンで白が生き、清々しく観る人を魅了する。

（和楓評）

三浦朱鳳書

◆重厚でエネルギーッシュな筆致が躍動し、スケルの大きな作品となつた。気迫に満ち、力強い上部構成の展開に圧倒される。（紅瑠評）

臨書（伊呂）鈴木英晴 「秋萩帖」

部分拡大



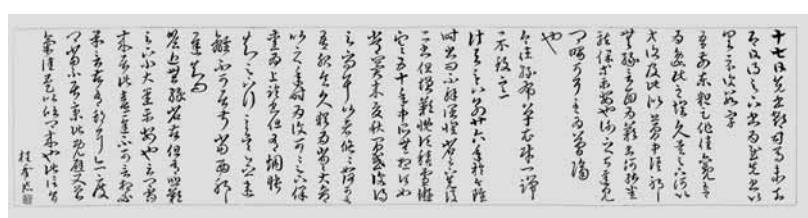
60×180cm

鈴木英晴臨

部分拡大

臨書（英峰）佐藤桂香 「十七帖」

部分拡大



45×175cm

佐藤桂香臨

◆三井本十七帖を丹念に臨書した。一点一画の表情的確に捉え、原本に真摯に向かって取り組んだ姿勢に敬意を表します。（萬城評）

「漢字」
（臨書の部）
紅瑠 金井みどり
澄春 新行内芳蘭
「かな」
千葉猪又 理扇

創作の部（37点）
漢字 - 4点
かな - 5点
現代 - 6点
前衛 - 22点
漢字の部（14点）
漢字 - 9点
かな - 5点

総出品点数
51点

（特選候補者）
（創作の部）

「漢字」
大拙 崑中 成山
もく 青木 藤漣
「かな」
玉松 田中 耶衣
松延 藤原三枝子
「現代詩」
もく 西川 藤家
「前衛」
蓮紅 大友 紅蓉
蒼原 佐藤 奎山
秀水 門脇 信子
月華 浅野 涌翠
大拙 阿部 俊吾
玉洲 遠藤 和香
容洲 阿部 邑里
紅瑠 佐藤 成美

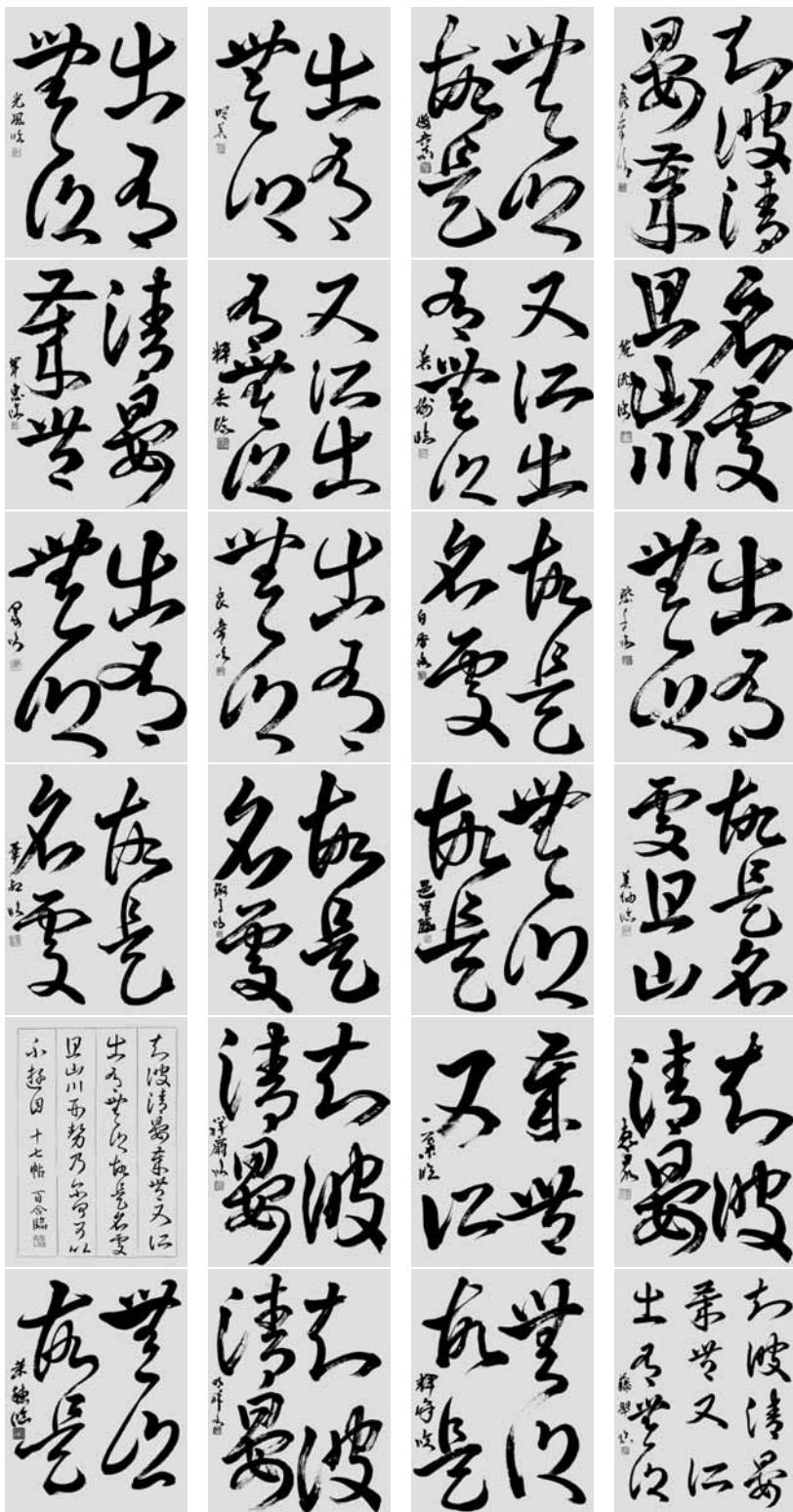
漢字研究部
(十七帖)

選評 川島舟錦

今月のホープ作品



二 上 香 柳



茉百華 翠光
合 翠
穂子紅 惠風

明祥淑良粹明
祥扇子章香美

輝一邑白英俊
峰葉里香樹吾

藤恵美紫麗泰
翠泉紬千流香

日々飽きることなく、さまざまな書体や書風の学習を積み重ねていることの窺える筆遣いです。直が多くメリハリのある十七帖が、作品つくりに生かされる時がくるはずです。

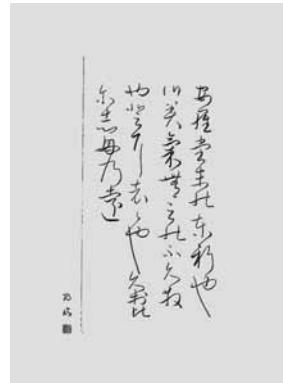
◎漢字研究部総評
今月の作品の中に誤字を含んでいる作品があつたこと、残念でなりません。臨書でも作品つくりにおいても、納得できなくてたくさ

ん書き込んでいるうちに、リズムを掴み筆遣いなどが容易になったころ、思わず陥ってしまいがちです。誤字に要注意、今一度客観的に、立ち返ることの大切さを思います。
十七帖は尺牘(手紙のこと)。文字の大小、太細、情感による線の強弱や美しさなどを体感しつつ、重厚で品格の高い臨書を目指しましょう。

か な 研 究 部
(秋萩帖)

選評 庄 司 紅 郷

今月のホープ作品



早 部 朗

◎かな研究部総評

かな研究部 特選 早 部 朗
ゆつたりとした秋萩帖の特徴を良く捉え「草が
な」の美しさを表現できました。原本の線質から
すると漢字力が必要とされますが、よくクリアさ
れ、日頃の努力のたまものです。
◎かな研究部総評
一つ一つばらばらのように見えて決してそうで
はない連綿線でつながっている秋萩帖の運筆は難
しいです。必死にくらいついている作品が多く頼
もしく思いました。

愛佳 トミ
理月子

洋里信
子美代

清嘉香
耀江苑

藤和紀
象子舟

わ花正とう春玉
か舞華かる汀松
伊伊石石飯上青
藤藤川井高利木
知幸悦津玲幹啓子
子子子子生葵郷
秀作(50音順)

一玉紅も竹掃一正四清雲春わ澄清水蕙恵大清明も清竹
心川瑠く原雪絢華谷月溪汀か春月海書泉雲月香く月美景
石佐須森渡津工岡鈴徳今宮都深飯坂渡築小矢西境八早
森藤田田邊田藤田木江井野丸澤島泉本邊貝林部川野木音
博綾香藤美李和麻白淳渥愛佳洋里信嘉香藤和紀
子奈舟谷盆花香美驚子仙理琴美代耀江苑豪子舟舟

横安村真本藤原早長橋中中中富千田田武高高七櫻桜坂小小木北叶荻大梅梅生
山嶋上下田原澤坂谷本山村島田田中玉山橋木五三田本木池村爪野原沢山津力
眞美曾百不シ佳由
蘭砂智佐美瑩典聖久紅知げ正瑞白耶哲花賢合和龍智芳泰直千美洋玉淳久代美
舟子恵代雪子典朋子霞子子美翠香衣子源雲子美舟博香子子和子藻子子子

明東無青大白石紅琇正上高桜書高紅墨、清有竜竹白伊土八も蒼大芳梓高大墨華こ樹書書玄蕙高こ澄華一た誠華菊も紅漢伯門蓮雲露習風韻華泉崎草泉真風縁、月秋泉扇露呂気生風雲蘭江崎阪花仙こ原泉游穹書井だ春祥心か和祥月く瑞

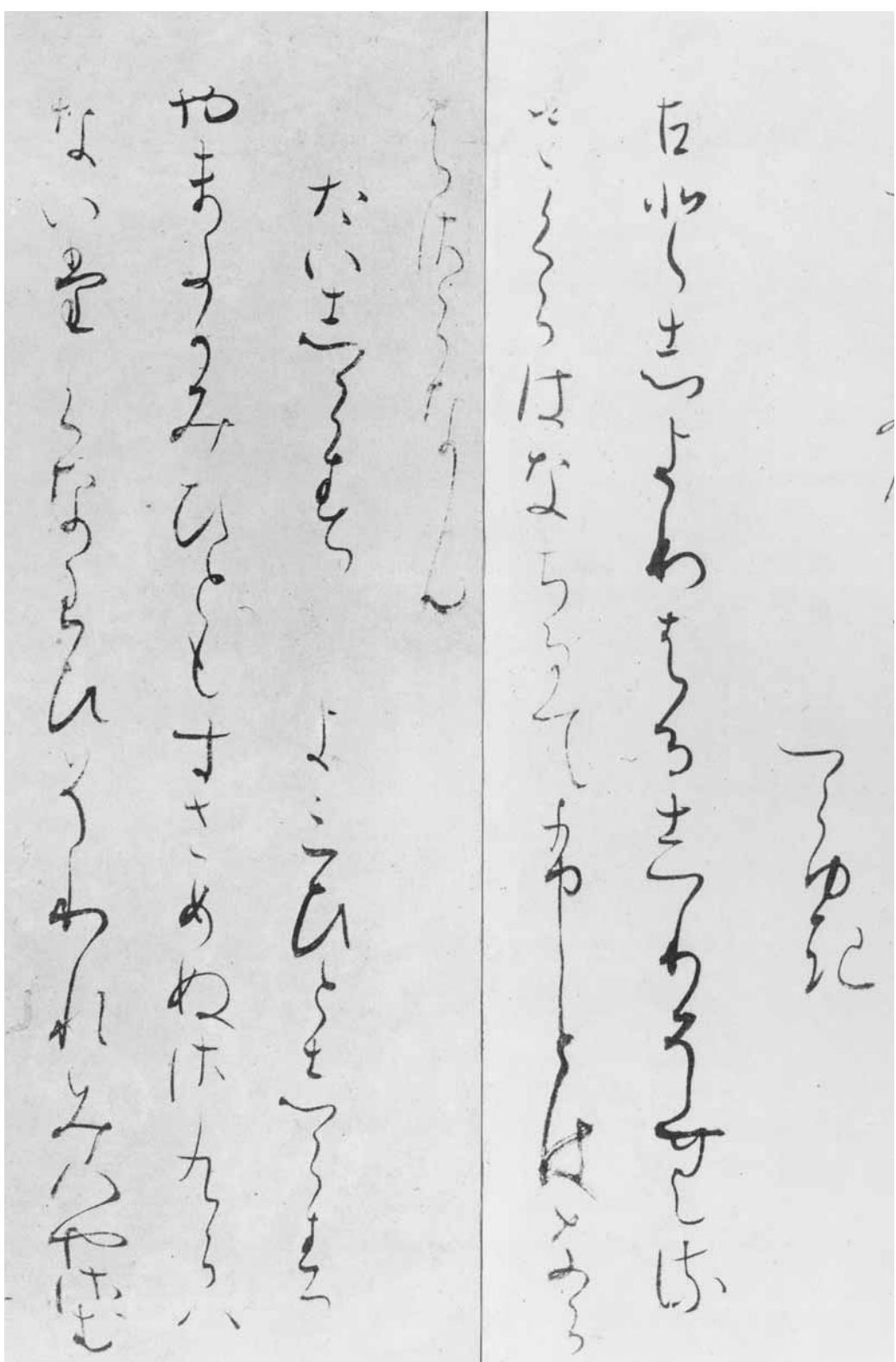
吉山山山三松松松林林萩二苗永鶴田武竹高高瀬春鈴艾束笠驚齊権小小木加葛片小尾岡梅植岩岩入板新青藍
田本中崎浦村丸津原通代井淵畠田澤山橋尾原木田藤木山藤代峰林口島藤岡野形村田原田潤田崎谷垣井澤
千 美喜 寿
由 紅紀和虹紅俊美富悠青惠藤白照よこはま 紅紀和虹紅俊美富悠青惠藤白照よこはま
鶴真清 道陽愛代奈美洋麗佳伯亞美宗恒い代雅京慶英祥紫蒼美江雪加萩智幸翠蕙熙照
紀玉恵子子石子子子子子子子泉子子子晴風子香風梢彩華子江子風陽美德霞子子祥雨姫世葵花鳳子漣瑛

麗祥香澄書高明正大書大樹蒼こ赤一大蒼竹附祥菁清初菁土大わ誘澄上明大正梅生椿土澄橋千蘭日堺森福土こ田高洞塗游澄光文澤紫書春游崎漢華拙徃雲原陽だ穂心雲陽原中紫湖月香湖気雲か韻泉漢阪華桃大翠氣春雅葉鼎新地山氣だ無崎書和水春彩筆

選春千芳昌幕蓮幸祥華高あた八中華八墨千幕高華上大生有澄高椿華
外汀潟蘭苑張紅扇だ紫仙崎かか街川祥街葉張真仙泉雲大秋春真翠祥
た東麗白上青姫大水洞桂一誉も春塚竹上千高附沙玉川
か向澤露泉蓮路雲壑書泉董田

148 渡渡吉吉遊山山柳矢本木村三三三真松松前本掘藤福深廣平樋崎浜畠長野根沼西名永中中中中戸渡利寺塚玉武匠瀧高閑
名邊込田川佐木根田口瀬口吉柳上田澤浦庭嶋尾川多切本田崩瀬山口尾野山谷口岸田川取井村村野江部子守前本沢井口原根
氏多美夕有登かか川久久恵み由ちす美名喜泰信翠素紅梅美雪琇登明小佳蒼智英ヶ節翠希瑛和幸喜流清幸玉は永芝美正奎美美悦寛笙一美よ藤紀佳華え幸一恵み貞代
略子瑛透綾季雅香季蘆笠翠華江季算目舟子ミ子舟子仙枝靈海源流枝子葉る簞季翠子心子蘆子心子風子理鳳子心子江櫻子子

☆P15の「関戸本古今集」の和歌の部分を原寸で示しました。ご活用下さい。



予告
2023
・
12月号
(752)

「古典鑑賞」・「古筆鑑賞」の課題

(1月15日締切)

古典鑑賞

九成宮醴泉銘(唐・歐陽詢) ③

古筆鑑賞

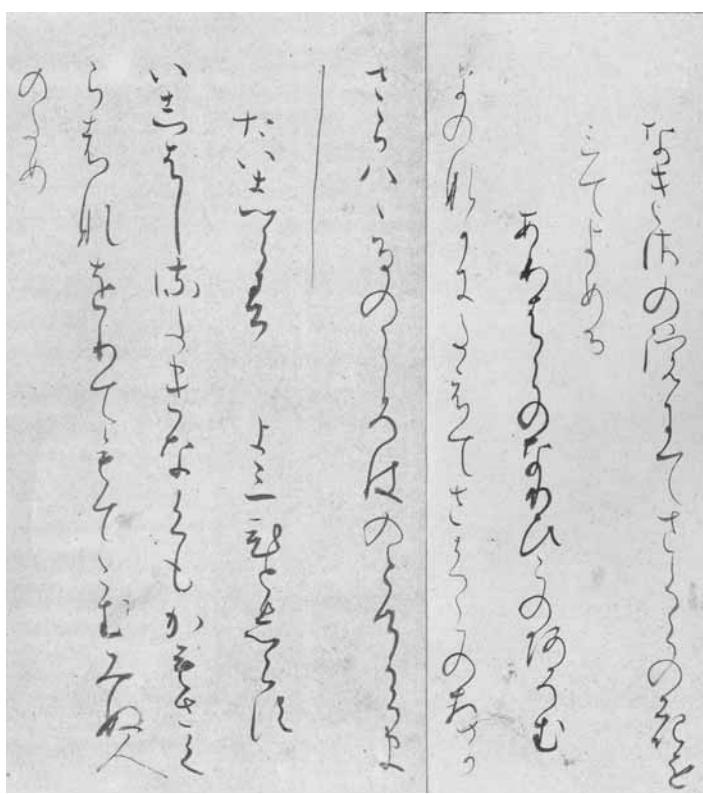
237
関戸古今集



(三井記念美術館蔵)

(掲載図版・55%に縮小)

（よみ）なぎさの院にてさくらの花をみてよめる／ありはらのあそむ／よのなかにたえてさくらのさか／さらばるのこゝろはのどけからま／し／だいしらずよみひとしらず／いしばしるたきなくもかもさく／らばなをりてもてこむみぬ人／のため



(掲載図版・50%に縮小)

